

帰ってきた！ 主任マン



この人：慶應義塾大学医学部 井上浩義 氏

この人、こんな所

インタビュー担当：放射線安全取扱部会広報専門委員会
上 蓑義朋 ((独)理化学研究所)

JR 総武線の信濃町駅改札を抜けると、横断歩道の向かいに慶應義塾大学病院の入り口があります。日本アイソトープ協会から最近発売された法令教育のためのビデオでは、真新しい RI 取扱施設でロケが行われていますが、それが慶應義塾大学医学部の施設です。そこで主任者を担当されている井上浩義先生に話を伺います。

上蓑：昔、福澤諭吉が慶應義塾大学を設立したと社会科で習いました。医学部の沿革、現在の施設の概要などについて紹介をしてください。
井上：創設者である福澤諭吉は幕末の大阪で、蘭学者の緒方洪庵の適塾に学んだ後、故郷である中津藩（大分県）の命を受け、江戸に下り 1858（安政 5）年、蘭学塾を創始しました。敢為な精神をもって欧米諸国を見聞した福澤は、帰国後、古いしきたりや慣習にとらわれない教育を実践しました。“独立”や“実学”など、現在も義塾が大切にしている理念は、このとき既に福澤教育の基礎となっています。福澤は、1868（慶応 4）年、塾舎を芝に移転するとともに学塾の礎を構築しました。あわせて時の年号にちなみ、学塾に“慶應義塾”という名称を冠したのです。1917 年に医学科を創設し、1920 年の大学令公布に伴い、文学部・経済学部・法



写真 1 放射線取扱施設（手前の建物が病院関係、奥の建物が医学部関係）

学部・医学部で構成される総合大学へと発展を遂げました。医学部は 2017 年に創立 100 周年を迎えます。その記念の年に合わせて現在、新病棟の建設が着々と進んでいます。放射線取扱施設としては事業所内の異なる建物内に 2 か所の管理区域を持っており、研究の目的に応じた設備を提供しています（写真 1）。

上蓑：施設は医学部と病院の両方で使われているのでしょうか。

井上：前述の施設は医学部だけの施設です。過去の医療分野における二重規制解除に従って、現在では、明確に病院の施設とは区別されるようになりました。

上蓑：先生は医学博士と理学博士の両方をお持ち

主任者 コーナー

ちであり、化学教室にも所属されています。経歴や自身の研究について紹介をしてください。

井上：「あなたの本業は？」と問われることが往々にしてあるのですが自分でも明確に返答できません。情けない話です。学部・大学院ともに九州大学理学部です。ここでの学位（理学博士）は「両性イオン交換膜透過における非平衡熱力学的解析」研究で取得しました。1989年に大学院を修了後、山口大学医学部生理学教室に助手として赴任しました。ここで、理学部出身だったら第一種放射線取扱主任者試験くらい合格できるだろうという乱暴な意見により、資格を取得したのが放射線との最初の関わりです。その後、大学教員を辞め、製薬会社など3つの企業を経て、1998年から久留米大学医学部放射性同位元素施設に専任講師として赴任し、本格的に放射線管理の仕事をさせていただきました。そして、その後、同施設の施設長、教授などを歴任させていただきました。この期間に医学部にいるのなら是非医学系の論文で学位をとを勧められ「エタノール急性摂取によって誘導されるL-3,4-ジヒドロキシフェニルアラニンおよび5-ヒドロキシ-L-トリプトファンの蓄積ならびに発火頻度に対するナルトレキソンの効果」という研究で博士（医学）を取得しました。その後に、慶應義塾大学医学部に移りましたが、（決して放射線管理が嫌になったわけではないのですが）ここでは、化学教室の教授として赴任しました。つまり、管理する側から一利用者になったのです。その状態が6年ほど続きましたが、諸般の事情から、2013年10月から医学部の放射線取扱主任者を兼任し、放射線管理の現場に戻って来ました。

上養：先生は大学での活動のほかに、ベンチャーなどの経営もされていると聞いておりますが。

井上：2001年頃に政府が発表した大学発ベン

チャー1000社計画に乗って、起業してしまいました。生来のお調子者気質が災いしたのだと思います。一旦、起業してしまいますと多くの方に支援をいただきましたし、社員もおりますので、事業を畳むに畳めない状態となり、現在も“健全”に経営しています。この会社では私が発明したアポ型ラクトフェリンや糖尿病診断キットなどを世界中で販売しています。苦しい時期もありましたが、大学人としてだけではない様々なつながりができたのが大きな財産だと思っています。

上養：先生はパン作りでも有名と伺っています。玄人はだしの趣味についてお聞かせください。

井上：そうですね。私は時々学内で知らない学生に「ナッツの先生」と呼び掛けられます。最初は誰のこと？ と思っていましたが、次第に慣れてきました(笑)。パンもそうですが、ナッツの研究もまったくの趣味で、本来の私の研究とは異なるものです。皆さんもそうだと思いますが、我々、研究者は時間に不規則で休日を家で過ごすことはまれです。一方で、子どもは3人おりますので何とか家族のコミュニケーションを図る必要があり、考え抜いた末に行き着いたのがパン作りでした。小さな子どもでも生地をこねることはできますし（まるで泥遊びみたい）、でき上がったものは皆で食べることもできます。短時間で結構深いコミュニケーションが取れるのです。そして、パンに加えていたのがアーモンドやクルミなどのナッツです。今では、ナッツの解説本が3冊、ナッツの料理本が3冊、そして先頃には台湾でもこれらの本が翻訳されて発売されました。パンの方も一昨年出場したプロの大会で入賞を果たすことができました（写真2）。完全に下手の横好きですが、時間を重ねると少しずつ形になっていくのは不思議ですね。



写真2 ブルーンとナッツを用いてカロリーを20%減じたメロンパン

上養：先生は慶應義塾大学医学部で、赴任以来6年連続で、ベストティーチャー（第1位）を獲得されているそうですが、教育に掛ける思いを教えてください。

井上：ベストティーチャーといっても学生による投票です。きっと単位に甘い先生ということになっているのでしょう。私の場合には特に教育に対する特別な思いというものはありません。自分自身が、できが悪かったので、こんな風に教えて欲しかったやあんな話を聞いたかったという思いがいつもあり、それらを、未来を担う子どもたちに少しでも提供できればとの思いが動機です。今、JST（科学技術振興機構）の高校生を対象とした科学教育事業“グローバ

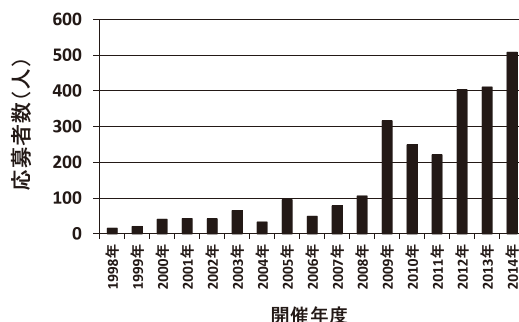


図 小学・中学生対象放射線教育の応募者数（定員40名）

ルサイエンスキャンパス事業”に採択をいただき、全国から選抜した70名の高校生に最新の医学・医療講演、スウェーデン研修などを施しています。また、そもそものオフキャンパス教育の出発点である小学・中学生を対象とした放射線教育は昨年で18年目を迎えました。最初は子供たちを集めるにも四苦八苦しました。中学校の校門外でチラシを配って、校長室に連れて行かれてお説教をされたこともありました。今では、図にあるように、40名の定員のところに500名を超える応募があり、募集に苦労することはなくなりました。ただ、受講できなかった生徒たちや保護者の方々に如何に放射線教育を施すかがこれからの問題だと思っています。このため、現在、企業と提携して放射線教育用 e-learning system の構築を急いでいます。

主任者コーナーの編集は、放射線安全取扱部会広報専門委員会が担当しています。

【広報専門委員】

上養義朋（委員長）、池本祐志、川辺 睦、鈴木朗史、廣田昌大、藤淵俊王、宮本昌明、吉田浩子